

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：13802

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19670

研究課題名（和文）家族が認識する看護師の意思決定支援における共同性に関する記述的研究

研究課題名（英文）Descriptive study of cooperation in decision-making support provided by nurses as perceived by families

研究代表者

影山 葉子（Kageyama, Yoko）

浜松医科大学・医学部・准教授

研究者番号：50566065

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、意思の確認が困難な患者の代理意思決定者としての家族が、看護師の意思決定支援を通して、看護師との共同性についてどのように認識しているのかを明らかにすることであった。COVID-19感染拡大の影響を受け研究協力者を募ることに難渋し、研究対象者は自宅で家族を介護した経験をもつ3名となった。研究方法を事例研究に変更し、要介護者の意思の推定の仕方や代理意思決定の際の専門職との関わり方について、複数回のインタビューにて聴き取った。専門職と共同することは、家族の意思の推定や代理意思決定を後押しすることとなっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、日本ではアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の普及・啓発が進められており、診療報酬にも反映されるようになってきている。ACPを実践するためには、患者・家族と医療・ケアの専門職が共に繰り返し話し合うことが重要である。本研究の成果は、ACPを実践する際の共同的意思決定のあり方や実践の仕方について考えるための手がかりになることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify how families, who are surrogate decision-makers for patients with difficulty expressing their wishes, perceive cooperation with nurses throughout decision-making support provided by nurses. Due to the difficulties in the recruitment of research collaborators caused by the impact of the COVID-19 pandemic, the study participants were three people with experience providing long-term care to a family member at home. The study method was changed to a case study, and multiple rounds of interviews were conducted regarding how families inferred the wishes of the person requiring care and how families interacted with professionals during surrogate decision-making. Cooperation with professionals helped to support the inference of the family member's wishes and surrogate decision-making.

研究分野：家族看護学

キーワード：家族看護 意思決定支援 共同性 質的記述的研究

1. 研究開始当初の背景

平成30年3月に「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」が改訂され、Advance Care Planning (ACP) の考え方が盛り込まれたことにより、患者や家族と医療・ケアチームの専門職が、共に繰り返し話し合うことの重要性が強調されるようになった。医療・ケアチームのなかでも、患者の最も身近な医療職として、患者の療養生活を支援する専門家である看護師の果たす役割は大きい。

1993年の日本看護科学学会看護倫理検討委員会の報告によると、倫理上の問題状況に対する看護師の反応の特徴について、患者や家族に心情的には関与していながらも、状況を変化させるような行動ではなかったことが報告されている¹⁾。2003年に創刊された雑誌『家族看護』の創刊号では、「家族の意思決定を支援する」とい特集がされており、そこでは、「家族が決定したのだから、そこには関与できない」という看護師の意見がみられ、家族の意思決定に参加し、家族を支援していく看護方略が浸透しているわけではない現状が指摘されている²⁾。その後の研究論文においても、家族の意思決定に看護師自身が納得できない困難感や、看護師から病態・治療的な内容を話すことができないために家族に情報提供ができないことへの悩みが明らかにされている³⁾が、看護師の役割としては、意思決定に参加している人々の調和を図る役割や家族の傍らで伴走する役割⁴⁾、家族の揺れる気持ちや悩みを理解し、その気持ちに寄り添い支援することが重要な役割⁵⁾であることが述べられている。

以上のような背景から、代理意思決定者としての家族への意思決定支援は、家族を意思決定主体ととらえ、看護実践は家族の意思決定に「参画する」というよりも、「支える」という従属的な実践であり、こうした実践に看護師は倫理的な葛藤を抱えていることがわかる。そこで本研究は、家族を代理意思決定者とすることを慣例的実践⁶⁾と批判的にとらえ、「患者の意思決定を代わりに担うのは家族だけなのか」という学術的問いを立て、看護師も家族と共に意思決定者 (decision maker) となる可能性について、家族の視点から明らかにしていくこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、患者の代わりに意思決定を行う家族が、意思決定を行うなかで関わった看護師との経験をとおして、看護師と意思決定を行う共同性についてどのように認識しているかを明らかにすることであった。

3. 研究の方法

共同性をどのように語るかは、文脈にも依存する。そのため、データから離れない、推論の少ない解釈にて率直に記述することが重要になるため、質的記述的方法を採用した。

COVID-19感染拡大の影響を受け研究協力者を募ることに難渋し、研究対象者は自宅で家族を介護した経験をもつ3名となった。当初の予定よりも研究対象者が少なくなってしまったため、研究方法を研究対象者個別の事例研究に変更した。

データ収集は、研究対象者にインタビューガイドを用いた半構成的対話式インタビューを個別に複数回行った。印象に残っている介護場面を想起しながら、日常生活のなかでの要介護者の意思の推定の仕方や、代理意思決定の際の専門職との関わり方について語ってもらった。看護職と関わった経験のみに限定すると十分なデータが得られなかったため、職種を問わず医療・ケアの専門職と関わった経験についてたずねた。本研究では、代理意思決定をする家族が専門職との「共同性」についてどのように認識しているのかを明らかにするために、「共同性」についてあらかじめ定義して問うのではなく、代理意思決定をした経験をふまえて、専門職と「意思決定を一緒にすること」について家族自身に説明したり表現してもらった。インタビューは承諾を得て録音し、インタビュー終了後に逐語録を作成した。

個別の事例研究として分析や論文化するにあたり、ライフストーリー研究を参照した。逐語録を繰り返し読み、要介護者の思いをくみ取りながら介護している場面や、くみ取った要介護者の思いを専門職に伝えている場面を抽出した。分析の際には、語られた内容そのものよりも、どのように語ったのかに注意を払いながら、家族が認識する専門職との「共同性」について記述をした。

なお、本研究は、浜松医科大学生命科学・医学系研究倫理委員会の承認を得て行った(研究番号: 19-234)。

4. 研究成果

COVID-19感染拡大の影響で研究協力者を募ることやインタビュー調査に行くことが難しく、データ収集に時間を要してしまったことで研究が遅れてしまい、研究期間は2年延長し5年間となった。

本研究の研究対象者は3名であったが、自宅に訪問させていただき、複数回のインタビューにて詳細な介護実践の聞き取りをすることができた。研究対象者の概要は、下記のとおりである。

・A氏(70代・男性): 自宅にて妻を約11年介護した経験あり

- ・B氏(50代・女性)：自宅にて父親の介護に携わり約6年(現在も介護中)
- ・C氏(80代・女性)：自宅にて夫を約7年介護した経験あり

研究対象者が3名となってしまったことから、データの抽象度をあげて一般化を目指すよりも、個別の事例としてまとめたほうが家族の関わり方が生き生きと詳細に伝わると考え、研究方法を事例研究に変更した。事例研究に関する知識を深めるために、方法論についての文献⁷⁾⁸⁾⁹⁾や看護学の事例研究に関する文献¹⁰⁾などを参照した。インタビューデータの分析については、要介護者と介護者の日常生活のなかに埋め込まれた介護実践の物語性に着目し、ライフストーリー研究に関する文献¹¹⁾¹²⁾¹³⁾などを参照した。

介護者である家族は、自分の意思を伝えたり自分でいろいろなことを決定することが困難な要介護者の思いを、これまでの要介護者との長い関係性の歴史や日々の介護をとおしてのやりとりのなかでくみ取っていた。自分とは異なる他者である要介護者の本当の思いがわからないことに家族は苦悩しながらも、医療やケアの専門職が共同的に意思決定に関わることで、その苦悩を和らげることができ、家族の思いや決定を後押しすることとなっていた。

今後は、学会発表や関心の近い研究者や臨床家との事例検討会などをとおしてさらに個別の事例の分析を深め、論文にまとめていく。今回の研究にて、「本人の意思の推定」と「代理意思決定」という2つの言葉について、改めて整理する必要性も明らかになった。これについては、障害者の権利に関する法的な枠組みからのパラダイムシフト¹⁴⁾といった法学の議論なども参照していく。

COVID-19感染拡大による行動制限期間中は、本研究に関連する研究として、性と家族の多様性に関する学際的な共同研究を行った。この研究の成果として、文献研究と医療機関の聞き取り調査による事例研究の2本の研究論文を執筆し、学会誌に投稿し公表することができた。医療・ケアの現場での「家族」というと、男女の性別二元論と異性愛の枠組みでとらえられることがほとんどであるが、この研究経験により、多様な性と家族を想定した意思決定支援の重要性や、医療・ケアに携わる専門職に対する教育の必要性などを明らかにすることができた。

2024年度の診療報酬改定によって入院料の通則が改定され、ACPが通則に盛り込まれたことにより、ACPの推進が今後ますます求められる。本研究にて家族側からとらえた専門職との「共同性」を明示することによって、性と家族の多様性を包摂した具体的なACPの進め方や共同的意思決定(Shared Decision-making: SDM)のあり方の提言につなげていきたい。

<文献>

- 1) 横尾京子 ほか、日本の看護婦が直面する倫理的課題とその反応 日本看護科学学会看護倫理検討委員会報告、日本看護科学会誌、13(1)、1993、32-37
- 2) 野嶋佐由美、家族の意思決定を支える看護のあり方、家族看護、1(1)、2003、28-35
- 3) 上澤弘美、中村美鈴、初療で代理意思決定を担う家族員への関わりに対して看護師が抱える困難と理由、日本クリティカルケア看護学会誌、9(1)、2013、6-18
- 4) 吉田紀子、中村美鈴、クリティカルケア熟練看護師が見出した延命治療に関する家族の代理意思決定を支える看護実践、日本救急看護学会雑誌、16(2)、2014、1-12
- 5) 本田有子、脳血管性認知症高齢患者の血液透析非導入・導入の代理意思決定をした娘の体験、日本腎不全看護学会誌、18(2)、2016、101-108
- 6) 平山亮、家族に「私」をどこまで伝えるかー終末期の準備行動におけるアンビバレンスー、第26回日本家族社会学会大会報告要旨、2016、48
- 7) ロバート K. イン、新装版 ケース・スタディの方法 第2版、東京、千倉書房、2011
- 8) 斎藤清二、事例研究というパラダイム 臨床心理学と医学をむすぶ、東京、岩崎学術出版社、2013
- 9) 山本力、事例研究の考え方と戦略 心理臨床実践の省察的アプローチ、大阪、創元社、2018
- 10) 山本則子 ほか、特集：ケアの意味を見つめる事例研究 現場発看護学の構築に向けて、看護研究、51(5)、2018、403-479
- 11) 桜井厚・小林多寿子、ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門、東京、せりか書房、2005
- 12) 桜井厚、ライフストーリー論、東京、弘文堂、2012
- 13) 桜井厚・石川良子、ライフストーリー研究に何が出来るか 対話的構築主義の批判的継承、東京、新曜社、2015
- 14) 上山泰、意思決定支援をめぐる近時の動向ー成年後見制度との関係を中心にー、同志社法学、72(4)、2020、445-467

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 影山葉子、三部倫子	4. 巻 33(1)
2. 論文標題 家族看護学におけるLGBTと「家族」 - 総説・レビュー文献の検討から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 88-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.33.1_88	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三部倫子、影山葉子	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 医療機関で性的マイノリティはいかに包摂されるか - 公立病院と診療所での「家族等」の取り組みを通して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 110-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 梶田美雄、三部倫子、ヨ・ヘイル、影山葉子
2. 発表標題 「セクシュアル・マイノリティ」や「DSDs（体の性の様々な発達/性分化疾患）を持つ人々」のあり方をどのように医療者に伝えるか - 保健医療社会的に医療実践者教育/研修を検討する試み -
3. 学会等名 第46回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------